

2021/1/6

(うと Q 世話し「誤解を覚悟で」シリーズ第 6 弾「経済」と「多幸感」)

敢えて、本日は誤解されるのを覚悟で。

緊急事態宣言に営業短縮の時短。即ち「経済」活動の「抑制又は萎縮」

しかし、以前お話致しました様に「経済」が単に「金回りや生産消費の拡大」だけを指すのではなく、より広範により深く「経世済民」つまり「世を経(おさめ)民を済(すくう)事」であるなら、拡大方向以外の手立てがあっても良いのではないのだろうか？

そういう「解法」を探すというやり方「も」あるのではなかろうかと思いはじめました。

何故そう考えるのかと申しますと、自分の中での優先順位、換言すれば今回の「渦」の因果関係の最深は「コロナよりもむしろ気候変動(温暖化)」の方がより根本的な問題である」という認識があるからです。

即ちコロナは「気候変動(温暖化)が齎す災禍の一部」にすぎない。

それが証拠に、コロナと同時に水害、異常高温、大雪も同時多発に起きている。

又、気候変動(温暖化)に歯止めをかけないと、或いは歯止めをかける新しい価値観や指標を見つけないと、コロナ以外にも災禍が次から次へと起こり続けるであろう、と。

もっと端的に申せば「今の経済(金回りや生産諸費拡大)」の縮小にこそ価値や幸福があるという考え方、または社会 system の発見と発明をすること。

それを考えていた時に、ふと浮かんできた keyword がありました。

「電気」

以前は、人口爆発や産業革命、internet 等の keyword に目がいていましたが、その奥に見え隠れしている別の言葉をなんとなく感じていたのですが、その正体が先程見えた気がしたのが、この「電気」という言葉でした。

もし「電気がなく」なれば、internet も大量生産も AI も大規模 data も電車や飛行機による大量輸送や遠方移動も近代医療もへったくれもありません。成り立ちません。

電気による灯りがなければ「夜の活動」すらなくなってしまいます。

夜の繁華街、コンビニ、信号機もヘッドライト、夜間残業も。

簡単に言うと「江戸時代に逆戻り」です。

江戸時代には灯りを得る菜種油や蠟燭には限りがあり、お金のない庶民は、夜は早々に床についていた様です。その分、現代に比して夜の経済活動分は結果、抑えられていた訳です。但し、他にやる事がないので自然と「貧乏人の子沢山」にはなった様です。

(逆に今は夜が明るいのと活動選択肢の拡がり子作り時間が減り少子化の元になっているのでは？とも)

要するに「電気の発明と普及」が経済活動の爆発や人口爆発、その結果として気候変動(温暖化)の重大要因になったのではなかろうか？の keyword として見えてきた訳です。

電気が時間軸空間軸双方の人間活動を一気に爆発させた張本人。

しかし冒頭の経世済民の考え方に基づいて「電気のエネルギー(発熱)量 ≠ 人間が持つ本

来の活性化量 (=多幸福感)」だと考えると、何やら「別の解」があっても良さそうな気がしてきました。

今年はその辺も考えてみたいと思っております。